



だいじゃ きば

# ① 大蛇の牙

かしまじんじゃ だんせつ  
鹿島神社の伝説

企画・脚本 齋藤良治

絵 引地昭夫

製作協力 丸森町教育委員会

だいじゃ きば  
大蛇の牙

かしまじんじゃ だんせつ  
鹿島神社の伝説



②

まるもりまちこさい かしまじんじや

丸森町小齋の鹿島神社には、

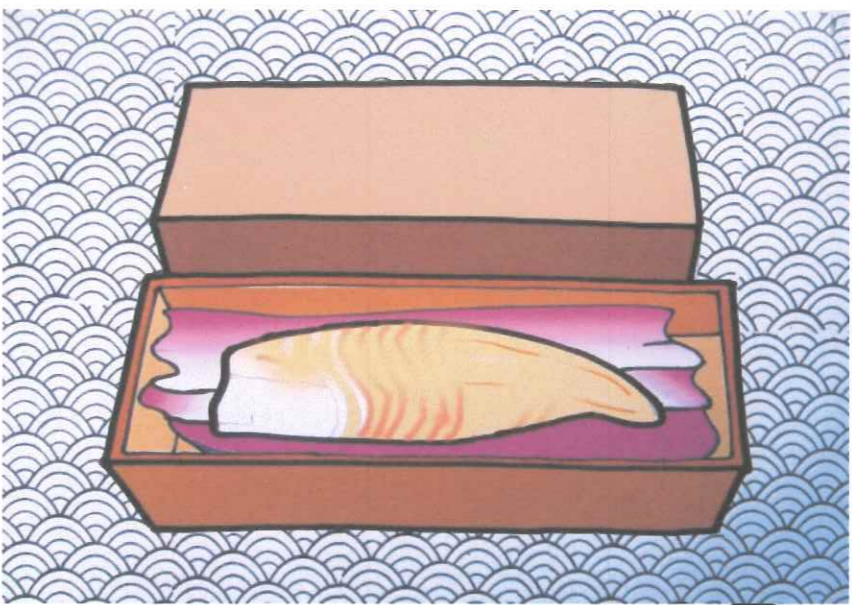
だいじや

きは

たからもの

った

「大蛇の牙」という宝物が伝わっています。



③

だいじや きば  
大蛇の牙は、

かしまじんじや たいせつ たからもの  
鹿島神社の大切な宝物として

だいじ  
大事にしまわれています。



4

昔 むかし 昔 むかし、ずうーと昔 むかし。

今 いま から四百五十年 よんひゃくごじゅうねん ほど前 まえ、

天正時代 てんしょうじだい といわれた頃 ころ のお話 はなし です。

鹿島神社 かしまじんじや のまわりには、

大きな木 おおき がたくさん おほ ありました。

その中 なか でも、神社 じんじや のわきには、

木の周り きまわ が大人 おとな の人 ひと が五・六人 にん で

ようやく まわ 回る まわ ような

一本 いっぽん の大きな桜 おほ の木 さくら がありました き。



⑤

桜さくらの木の根きもとの方ねは、自然しぜんにくされて、

大きおおなほこららになっていました。

この近ちかくを通とおると だれでも、

「ジメジメなんしていて、何なんとなく、うすきみ

悪わるいなあ。いやな気持きもちがするなあ。」

とつぶのでした。



⑥

ほこらは、おとな 大人の人が五・六人にん かくれても

わからないほどの

おお 大きな おお 大きな穴あな になっ  
ていました。

おお 大きな桜さくらの木きは、

ほこらがあってもいきお 勢いきおいがよく、

たか 高く、たか 高く伸のびて、き 木うえの上ほうの方ほうには、

えだは 枝葉しげがたくさん茂しげって  
いました。

そのため、き 木したの下うすぐらは薄うすぐら暗うすぐらく、

ジメジメうすぐらして  
いて、

じめん 地面こけには苔こけがびっしりはと生はえて  
いました。



7

或る年の夏。

突然、真黒い雲が空一面に

広がったかと思うと、

大粒の雨がザアザアと降ってきました。

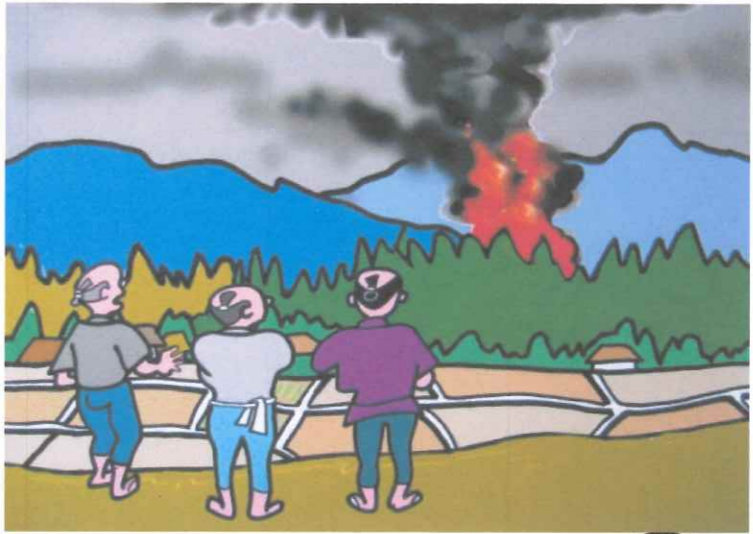
ピカピカッと、稲妻も光りだしました。

その時、ドドーンと、

耳も張り裂けるような大きな音がして、

大きなほこらのある桜の大木に

雷が落ちました。



8

かみなり お さくら たいぼく も だ  
雷の落ちた桜の大木は、燃え出し、

ま か ひ まっくろ けむり  
真っ赤な火と真黒い煙が

た のぼ  
モクモクと立ち登りました。

むらびとたち  
村人達は、

かしまじんじや かみなり お  
「鹿島神社に雷が落ちた！」

たいへん たいへん  
大変だ！大変だ！」

しんぱい なが  
といて、とても心配して眺めていました。

ひ よる ひる  
その火は、夜となく、昼となく、

なんにち も つづ  
何日も、燃え続けました。





9

なんにち あと ふしぎ おも  
何日か後、不思議に思つて、

むらびと かみなりさま お さくら き ところ  
村人が雷様の落ちた桜の木の所に  
おそ おそ ちかよ み  
恐る恐る 近寄つて見ると、

さくら き あか ひ だ  
桜の木は、赤い火を出しながら、

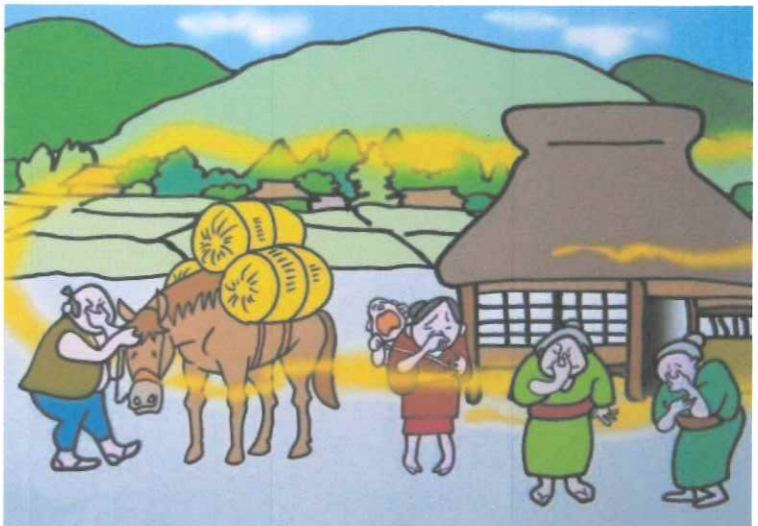
も  
どんどんと燃えていました。

なまぐさ  
「なんだ！ この生臭い、

にお  
いやーな臭いは！」

なん にお  
何ともいえない臭いが

いちめん ひろ  
あたり一面に広がっていたのでした。



10

その煙けむりと生臭なまぐさい いやーな臭においは

村中むらじゆういったいに広ひろがりました。

村人達むらびとたちや村むらを通とおる人々ひとびとも

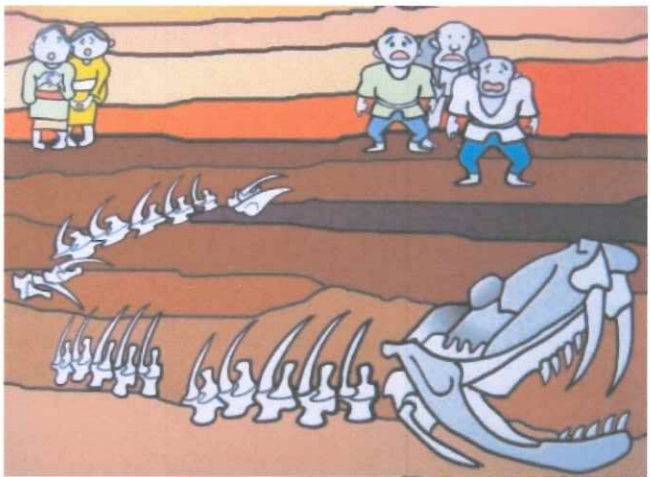
「ああ、臭くさい、臭くさい！ 氣持きもちが悪わるくなる！」

と言いって、苦くるしくて我慢がまんできないほどに

ななってしままいました。

牛うしや馬うまも恐おそれて、いななき、泣なき叫さけび、

村中むらじゆう、大変たいへんな様子ようすにななってしままいました。



11

しかし、何日も燃え続けた桜の大木も

焼けて、ついには倒れてしまいました。

村人達が恐る恐る焼けた桜の大木の所に行って、その様子を見ると。

「あっ！これは大蛇の骨ではないか！」

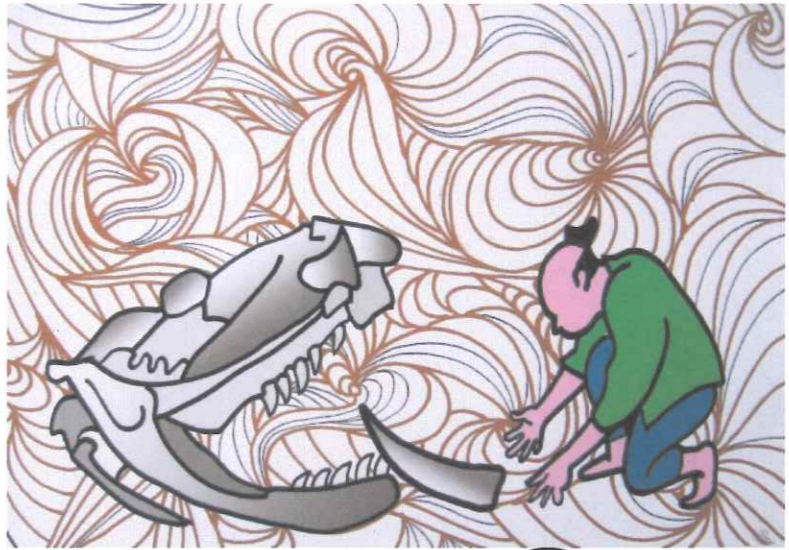
と、驚きの声をあげました。

そこには、何と大きな大きな蛇の骨が

ずらりと並んでいたのです。

太いところの骨は、

両手でかかえるほどもありました。



12

これを見た村人達は、

大変に驚き、恐ろしくなりました。

その時、勇気のある村人の一人が、

恐る恐る大蛇の骨に近付いていきました。

すると、頭の方の焼け残ったところに

今まで見たこともないような

一つの大きな牙が残っていました。



13

むら ひとたち  
村の人達は、あまりの恐ろしさに

かしまじんじゃ あつ  
鹿島神社に集まり、

ぐうじ  
宮司さんに

「どうぞ、大蛇のたたりがないように

おはら くだ  
御払いをして下さい。」

と、お願いをしました。

ぐうじ  
宮司さんは、うやうやしく

ゆた はら  
「湯立て」というお祓いをして、

かみさま っ  
神様のお告げをうかがったのでした。



14

ぐうじ  
宮司さんは、

「桜の大木のほころびに、大きな毒の蛇が

住んでいた。この毒の蛇は、

のちのち村人に襲いかかろうとしていた。

かしまじんじや かみさま  
鹿島神社の神様は、

むらびと すく かみなり お  
村人を救うため、雷を落として、

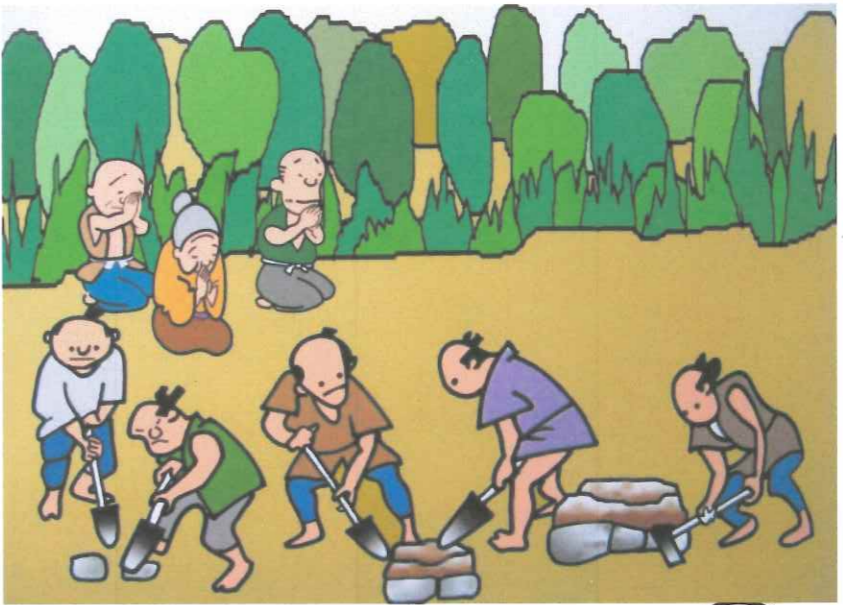
どくへび や ころ たいじ  
毒の蛇を焼き殺して退治をした。」

と、お告げになりました。

むらびとたち  
村人達は、

かみさま だいじや たいじ  
神様が、大蛇を退治してくれたことに、

なみだ なが よろこ  
涙を流し、喜びあっていたのです。



15

その後、ご

むらびとたち だいじゃ ほね あつ  
村人達は大蛇の骨を集めて、

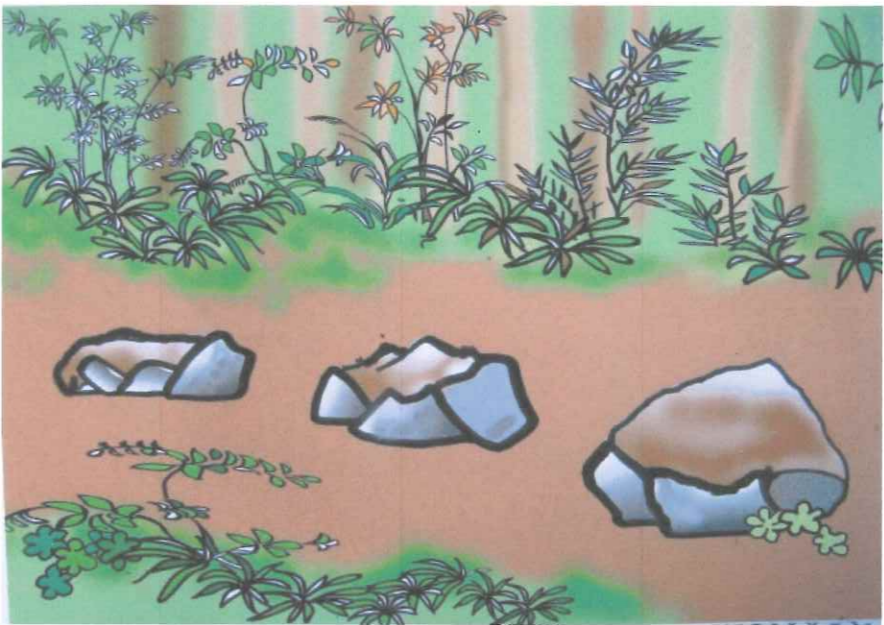
じんじゃ にしがわ へび みや つく  
神社の西側に蛇のお宮を造りました。

だいじゃ ほね おお  
大蛇の骨は、大きいので

あたま どうたい わ みっ つか つく  
頭、胴体、しっぽに分けて、三つの塚を造り

たたりのないように、

ていねいに葬ほうむったのでした。



16

いま いま 鹿島神社には、  
かしまじんじや

大蛇を  
だいじや

頭、胴体、しっぽに分けて埋めた  
あたま どうたい わ

三つの塚が残されています。  
みつ つか のこ





17

その時<sup>とき</sup>みつかった大蛇の牙<sup>きば</sup>は、

かしまじんじや<sup>たからもの</sup> 鹿島神社の宝物として、

いま<sup>だいじ</sup> だいじ<sup>つた</sup> 今も大事に伝わっています。

おわり